

## オートロックにご用心

葉室 丈二

「ええーっ、どうして?」

車のドアが開かない。ドアロックを解除しようとしたが作動しない。慌ててスタートボタンを押す。最近の車はキーを使わなくてもエンジンが掛かる。しかしエンジンは掛からず、フロント表示パネルに「キーを感知出来ません。説明書をお読みください。」の文字が出る。

ある土曜日の夜の出来事である、コーラスの練習から帰り、車をガレージに入れエンジンを切りキーとバッグを持って車外に出たが、中を見ると上履きのスリッパが助手席に残っている。そこで手にしていたキーとバッグを棚に置き、車内に入り左手をスリッパに伸ばした時、何故か右手でドアを閉めてしまった。スリッパを取り上げ、さて外に出ようとドアノブを引きドアを押したが、何とドアが開かない。

「ええーっ、どうして?」と冒頭の部分に戻るのだが…。表示パネルが指摘するキーは車外なので仕方なくボックスから説明書を取り出し、ルームランプのスイッチを押すが灯かない、「ええーっ」と再び声を出す。どうして?と続けてヘッドライトのスイッチをひねるがこれも灯かない。思わずフォーンを押すが何とこれもロックされていて動かない。車内のあらゆるボタン、ダイヤル、スイッチを手当たり次第押したり廻すが何の反応もない。時計を見る。9時50分。20分が経っている。車は完全にオートロックされ、機器はびくとも動かない。何処かにマニュアル機能があるだろうと最初はたかをくくっていたのがどうもそうではなくなってきた。心中は結構動揺している。何か手段はないか、ボディを内側から力づくで叩く、大声で叫んでみる、しかし音は響かない。手が痛い、声が渴れる。携帯電話を思いつぐが車外のバッグの中。

10時20分。もう1時間近くになる。あーっ困った困った。じわじわと不安が募ってくる。それにしても家人はガレージを見にも現れないのは何たることか。

車は完全にロックされている。密室である。空気が持つのか、このまま時間が経てば窒息死ではないか、意識は飛躍する。思わずシートに身を沈め落ち込む。何だか空気が薄くなってきたような気がする。息苦しい…。否々そんなことはない。換気口はある筈だ。朝までぐらいは保つだろう。迫りくる窒息死への恐怖を打ち消し再び脱出法を考える。10時48分。未だ11時前だ。前を通る車や人もあるかもしれない。頼みはその人たちに何とか気付けてもらうことだ。しかし手段が見つからない。それでもあちこち触っているとウインカーレバーが作動してウインカーが点滅した。「おうっ」と喜んだが光が弱い。ところがそのレバーを手前に引くと…、なんとハイビームが点灯した。明るい、よし、これで何とかS・O・Sをと、必死でビームの点滅を繰り返す。目の前をゆくり車が2台通り過ぎたが止まらなかった…。

「お願いだ、誰か通ってくれ!」なんだか悲しい、祈る思いでビームの点滅を繰り返していると、突然向かいの家の玄関が開きその家の奥さんが現れた。

「あーあよかった!! 気付いてくれ、頼む!!」彼女はライトの点滅を怪訝そうに見つめて少し門から出て道を渡ってくる。「そうっ早く早く」思わず叫び手を大きく振る。しかし道の真ん中まで出て来た彼女はこちらを認めると軽く会釈をして戻ろうとする。「ちょっと待ってっ!」帰られては何にもならない、大きく手を廻して手招きをした。彼女は不思議そうに、しかし戻って来て車に近づいた。

私はウインドウ越しに大声で叫んだ。「家の者を呼んでください!お願いします!」彼女はとにかく顔いて我家のドアホーンを押してくれた。(オフの声)「はい、なんですか?」